

「コロナ」はいったん脇に置きまして、ここで2020年のIMRCにとっての大きな変化に言及しておきたいと思います。それはメンバーの増員とその背景についてです。

今年度から交代したセンター長をはじめ、新たに4人が加わりました。それぞれの氏名や専門分野は本編でご覧いただいた通りですが、共通しているのは、いずれも京都精華大学の教員である点、しかし、狭義のマンガ研究を本業や専門にしていないという点です。

それは、IMRCがマンガ研究を軸としながらも、より多面的な展開を志向していることを示唆しています。つまり、国際マンガ研究センターの研究対象は、「マンガ」だけでなく、「図書館学」や「日本語教育」といった、「マンガと〇〇」の組み合わせにも照準しているのです。もっと言えば、そうした組み合わせが、単なる足し算ではなく掛け算になるような展開をねらっています。なぜなら、このところIMRCや本学に対し、マンガをテーマとしたさまざまな専門分野との研究交流や、自治体や企業を介したマンガ研究の社会還元が、国内外で求められているからです。

京都精華大学には現在、マンガ学部のほかに、芸術学部とデザイン学部がありますが、2021年度より新たに国際文化学部とメディア表現学部が開設する運びとなりました。詳細は割愛しますが、これによって例年以上に、大学本体でも教員の入れ替わりが生じています。そして、その中にはやはり、マンガ研究が専門ではないけれど、マンガやマンガ研究に関心を持ち、横断的な研究をしたいと考えている教員が少なからず存在します。

すなわち、本学では、芸術やデザインに並ぶ表現として、また、グローバルに受容される文化として、さらには、オンラインにも適したメディアとして、マンガがますます汎用性の高い教育・研究の材料として期待されているのです。そのため、2006年度から約15年間にわたって、マンガ学部や京都国際マンガミュージアム、そしてIMRCが蓄積してきた研究成果や資料群を、より開かれた形で活用しようとする機運が高まりつつあります。

こうした背景の中でIMRCのメンバーが増員されたわけですが、その矢先の「コロナ」でした。マンガミュージアムは休館や開館時間の短縮を余儀なくされ、研究展示は無観客に切り替わり、講演やワークショップも中止が続くなど、いろんな困難に直面しました。ただ一方で、そうした事態だからこそ「マンガ・パンデミックWeb展」のようなチャレンジも可能になりましたし、オンライン・トークショーも前向きに実現しました。そう考えると、「国際マンガ研究センター」という名にふさわしく、国際的な研究活動を推進するうえで、結果的に「コロナ」は私たちのスキルや経験値を高めてくれました。

というわけで、IMRCにとっての2020年は、組織の構成としても個人々の経験としても「次」を見据えるための貴重な一年となりました。これを来年以降の

活動にきちんと繋げていけるよう、多彩なメンバーでさらなる歩みを続ける所存
ですので、引き続きのご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、前号より、この年次報告書はオンラインに切り替えています。即時性
や拡張性において、より有用なメディアであるという点がその決断の大きな理由
ですが、ここにも「コロナ」が影響しているのかもしれません。

「京都精華大学国際マンガ研究センター」とは

—
—
2006年に創設された京都精華大学国際マンガ研究センター(IMRC)は、
京都国際マンガミュージアムを拠点に、
マンガ文化全体に関する多面的な研究を実践している機関です。
国内外のネットワークを構築する一方、マンガ本や
マンガ原画などのアーカイブを行い、研究を進めています。
その成果を展覧会やイベントなどの形で公開することで、
マンガ文化の価値の創出と向上に貢献しています。

運営体制[2020年度]

—
—
センター長

さそうあきら

—
研究顧問

吳智英

—
センター専任教授

菅谷充(すがやみつる)

—
メンバー

伊藤遊/雑賀忠宏/佐々木美緒/住田哲郎/ユースギョン/吉村和真

京都精華大学国際マンガ研究センター年次報告書 2020

—
—
発行日

2021年3月31日

—
発行元

京都精華大学国際マンガ研究センター
〒604 0846 京都市中京区烏丸通御池上ル
京都国際マンガミュージアム内
tel 075 254 7414 (マンガミュージアム)
fax 075 254 7424 (同)
web <http://imrc.jp>

—
制作

網島卓也/榊原充大

—
表紙デザイン

網島卓也

—
編集

伊藤遊

